

「ツキノワグマと共存するということ」講演要旨

講師 濱口あかり氏

(NPO 法人信州ツキノワグマ研究会、長野県クマ対策員、広域鳥獣保護管理員)

ツキノワグマの生態・出没状況

- ・ 長野県及びその周辺県のクマの生息状況をみると、長野県及び、隣接する山梨県、岐阜県などほぼ全域に生息している。
- ・ 長野県で調査されたクマの推定個体数の推移では、地域個体群ごとにみると増減があるものの、12年前に比べるとやや増加傾向にあるとされている。全国的にみると長野県の推定個体数はトップレベルにある。
- ・ 年ごとの目撃数は、年によって大きく変動し、大量出没年のみが多く、2018年は2016年と同じレベルであり、推定個体数の推移に連動していない。
- ・ 堅果類の豊凶との関係を見ると、豊作の年はクマ棚の形成が少ないのに対して、実りの悪い年はクマ棚が多い傾向がある。
- ・ 堅果類の実りが少ないとクマが出てくるという中には、クマの生活と人の生活が長い間のうちに変わってきていることも影響していると考えられる。その理由としては、里山を人が多く活用しなくなったことや、奥山の針葉樹林化や里山の広葉樹林の成長で里山がクマにとって生活しやすい環境になっていることもあげられる。
- ・ 人里に出てくる理由は、人里には、農地だけでなく林縁の液果類など食べに来て、そのうちの一部のクマがそうした箇所を隠れられる箇所として使い、農地等へ進出しているケースがある。
- ・ 人側が無意識で置いた餌（廃棄果実や農作物、防護されていない畑、牛舎の飼料）が誘引していることも大きい原因
- ・ クマは縄張りがない動物のため、餌が楽に食べられる箇所に多くの個体が集まってくるため、1頭捕獲して被害減るといふ動物ではない。
- ・ クマの人身被害件数は、全国的には40~140件前後発生し、長野県は2014年の32件が最大。大量出没に人身事故が発生している。

出没場所における集落点検調査

- ・ 集落内のクマの出没の可能性が高い場所を主に2014年の人身事故発生場所などで調査し、改善が必要な場所等を整理し、効果的な対策の実施につなげる。
- ・ 調査は、事故発生場所等の点の情報（インターネットの公開情報等）から、クマの痕跡、クマの食べ物などの誘引物、隠れ場所の有無を調査し、経路や出没要因を把握していく手法で実施

- ・ 出沒場所を含む集落内には、クマの痕跡や隠れ場所が確認された。
- ・ 出沒地点付近の誘因物に対する対策（除去等）は未実施の場所が多く、出沒要因が除去されておらず、再び出沒が発生する可能性が確認された。

今後取り組むべきこと

- ・ 出沒・事故発生後に以下の対応を適切にしていくことが必要。
 1. クマ対策員等による迅速な現場検証（出沒要因、集落への依存度、個体の特定につながる遺伝情報等の把握等）、
 2. 検証結果の共有化
 3. 再発防止策の実施（出沒要因の除去、経路の分断化等）
- ・ 被害対策の効果を上げるには、正確な情報収集をし、迅速な対応を進めることが重要
- ・ 今後もクマへの対応は続けていく必要が求められることから、出沒場所、状況の情報のデジタル化による行政、住民との情報共有、出沒させないための数年後の発生場所になった集落の点検、地域に根差した総合的かつ継続的な野生動物対策の実施が必要。